

## column 《現場風景・あかり光景》108

太平洋戦争直前に完成した、日米の友情の証「旧国立公衆衛生院」のあかり光景  
～日本の公衆衛生史の生き証人としての建築物～

旧国立公衆衛生院は建物内部がしっかり残されている。電設・建設を志す若者たちにぜひみてもらいたい物件だ

写真は現在、東京都港区立郷土歴史館（港区白金台）などの施設が入る「旧国立公衆衛生院」の1F中央ロビーだ。

旧国立公衆衛生院は文字通り、日本の公衆衛生を司ってきた調査研究機関だ。1923（大正12）年9月1日、関東大震災のあった当日に、アメリカのロックフェラー財団から、震災後の復興支援の一環として、公衆衛生の専門家育成、および訓練機関の設立を援助したい旨、日本政府に公式の申し入れがあった。旧国立公衆衛生院はそれを受けて、1938（昭和13）年、東京帝国大学伝染病研究所並びに附属病院の敷地内に隣接して建設されたものだ。

設計は当時の日本を代表する建築家にして、後に東京帝国大学総長にもなる内田祥三。旧国立公衆衛生院は、東京帝国大学のほとんどの建物の設計を手掛けた内田祥三の代名詞「内田ゴシック」の典型的な事例の一つとされる。

それにしても関東大震災の当日にロックフェラー財団がこのよう

生史に不可欠の存在感を現在に至るまで発揮している、国立公衆衛生院（現・国立保健医療科学院）の拠点施設整備を促進してくれたという事実には頭が下がる。

この施設を造るためにロックフェラー財団が投じた寄付金は総額350万ドル超（現在の130〜140億円ぐらい!）だったという。そして旧国立公衆衛生院の完成から3年後に、ご承知のように日本はアメリカに宣戦布告を行い、太平洋戦争の幕が開くのだ。それを考えると、何やらいろいろと複雑な思いが兆す。

それはともかく、2007（平成19）年から空き家になっていたこの建物が2018（平成30）年に公共施設として再整備され、一般公開されるに至ったのは、まことにめでたい。お蔭でこんなにすごい「あかり光景」を我々は目の当たりにできる。

絶妙な間接照明に浮かび上がるUFOのような丸い吹き抜けロビーが、永遠に平和のシンボルになることを、心から願いたいものだ。（E）